

紀伊国造の成立と展開

鈴木 正信

一 はじめに

『先代旧事本紀』卷十「国造本紀」(以下『国造本紀』と略記)には、およそ一三〇に及ぶ国造の始祖と任命時期、そして系譜が掲載されている。その記事内容は実に様々であるが、中には複数の国造が同じ始祖を共有している場合や、他の国造と同祖であることを明記する場合があり、それらを整理することによって、国造の間に形成された同祖系譜の存在をうかがい知ることができる。

この同祖系譜は、いくつかのまとまりを形成していることが、すでに先行研究において指摘されている。たとえば、太田亮氏はそれを皇別・天神・天孫・地祇・未詳に大別し、さらに皇別を神武系・孝昭系など六系統、天孫を凡河内氏系・出雲氏系など七系統、天神を高魂尊系・神魂尊系など三系統、地祇諸氏を大和氏系・三輪氏系など四系統、出自未詳を天湯津彦系・天韓襲命系など四系統、これら計二四系統に分類した¹⁾。また、鎌田純一氏は史料ごとに分類を行い、『日本書紀』(以下『紀』と略記)に見える国造の系譜を十三系統、『古事記』(以下『記』と略記)を十一系統、『国造本紀』を二九系統とし、計四七系統(重複を除く)に細分化した²⁾。その後も、新野直吉氏は諸史料を勘案して計二五系統に³⁾、篠川賢氏は『国造本紀』の系譜を計十七系統に、それぞれ分類を行っている³⁾。

その中から本稿では、紀直氏から輩出された紀伊国造の同祖系譜を取り上げる。まず『国造本紀』紀伊国造条には、

紀伊国造

檀原朝御世、神皇產靈命五世孫、天道根命定賜国造。

とある。ここでは神武天皇の時代に、カミムスビ⁶⁾の五世孫に当たるアメノミチネが、初代の紀伊国造に任命されたと伝えている。これに対して、同じく『国造本紀』石見国造条・葛津立国造条には、

石見国造

瑞籬朝御世、紀伊国造同祖、蔭佐奈朝命兄大屋古命、定賜国造。

葛津立国造

志賀高穴穗朝御世、紀直同祖、大名草彦命兄若彦命、定賜国造。

とあり、それぞれ「紀伊国造同祖」「紀直同祖」と明記されていることから、これら二つの国造は紀伊国造(紀直氏)と同祖関係を形成していることが分かる。また、『国造本紀』大伯・吉備中県・阿武・淡道・久味・天草の各国造条には、

大伯国造

輕嶋豐明朝御世、神魂命七世孫佐紀足尼、定賜国造。

吉備中県国造

瑞籬朝御世、神魂命十世孫明石彦、定賜国造。

阿武国造

纏向日代朝御世、神魂命十世孫孫味波々命、定賜国造。

淡道国造

難波高津朝御世、神皇產靈尊九世孫矢口足尼、定賜国造。

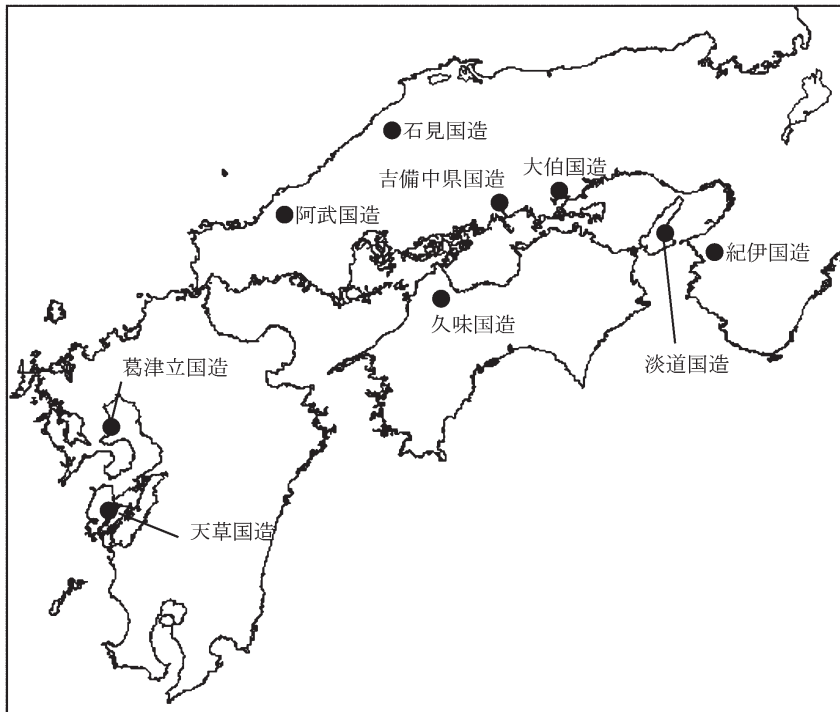
久味国造

輕嶋豐明朝御世、神魂尊十三世孫伊与主命、定賜国造。

天草国造

志賀高穴穗朝御世、神魂十三世孫建嶋松命、定賜国造。

とあり、これらはいずれもカミムスビの後裔を称している。よって、これらの諸国造はカミムスビを介して、紀伊国造と同祖関係を結ん



【図1】紀伊国造の同系国造の分布

でいることになる。

ここに挙げた各国造の本拠地については、以下のように推定されている。⁽⁷⁾これを地図上にプロットしたものが【図1】である。

石見国造：石見国那賀郡石見郷（現在の島根県浜田市）
 大伯国造：備前国邑久郡久郷（現在の岡山市邑久町）
 吉備中県国造：備中国後月郡県主郷（現在の岡山県後月郡）
 阿武国造：長門国阿武郡阿武郷（現在の山口県阿武郡阿武町）
 淡道国造：淡路国三原郡（現在の兵庫県三原町）
 久味国造：伊予国久味郡（現在の愛媛県松山市久米窪田町）
 天草国造：肥後国天草郡天草郷（現在の熊本県天草町）
 葛津立国造：肥前国藤津郡（現在の佐賀県藤津市・藤津郡太良町）
 これらの諸国造の分布について篠川賢氏は、紀伊国造（紀直氏）も含め全ての国造が西日本の沿岸地域を本拠としていることに着目し、紀伊国造（紀直氏）が対外交渉に赴く際の海上交通を媒介として、こうした同祖系譜が形成されたとの見解を提示している。⁽⁸⁾紀直氏がヤマト王権の対外交渉に活躍したことは、「紀直祖豊耳」（『紀』神功撰政元年二月条）や、「紀国造押勝」（『同』敏達十二年（五八三）七月丁酉条・十月条、後掲）の事例からも明らかであり、篠川氏の見解は首肯すべきであろう。

さて、ここで看過できないのは、諸国造が伝える系譜の内容が二つのパターンに分類できる点である。前述の通り、紀伊国造をはじめとして大伯・吉備中県・阿武・淡路・久味・天草の各国造は、いずれもカミムスヒにまでその系譜を遡らせているのに対して（下線部）、石見国造と葛津立国造の二国造は、「紀伊国造」もしくは「紀直」と同祖であることを明記するのみで（波線部）、カミムスヒには一切言及していないのである。

はたして、この相違は何に起因しているのだろうか。氏族系譜

のあり方が現実の氏族同士の関係を大きく規定するものであるとするならば、それは観念的につくり上げられたものでは決してなく、系譜の中核となっている紀伊国造(紀直氏)の実態を何らかの形で反映している可能性が高い。こうした観点から、以下では紀直氏の始祖とされている人物(神格)と、それを取り巻く同祖系譜を分析することにより、紀直氏の成立と展開について考察を加えることとしたい。

二 紀直氏の始祖

紀直氏に関連する系譜(『国造次第』『紀伊国造系図』など)の特に神代部分に登場し、かつ『記』『紀』などの他史料でも紀直氏の始祖とされている人物(神格)としては、カミムスヒ、アメノミチネ(『国造次第』では初代、ナグサヒコ(第五代)、ウジヒコ(第六代))を挙げることができる。また、紀直氏の系譜には見えていないが、他史料に紀直氏の始祖として登場する人物(神格)には、アラカハトベ、チナソ、ミケモチ、ワカヒコがいる。まず、これらに関する記述を確認しておきたい。

カミムスヒについては『国造本紀』紀伊国造条(前掲)において、初代の紀伊国造であるアメノミチネをカミムスヒの五世孫としている。また『新撰姓氏録』(以下『姓氏録』と略記)河内国神別 紀直条にも、

紀直

神魂命五世孫天道根命之後也。

とあり、河内国に居住していた紀直氏も、カミムスヒの五世孫であるアメノミチネの後裔を称している。さらに『同』和泉国神別 紀直条には、

紀直

神魂命子御食持命之後也。

とあり、和泉国に居住した紀直氏の場合は、ミケモチの後裔を称しているが、やはりその系譜をカミムスヒに結びつけている。

アメノミチネは『国造次第』に「第一代、天道根」とあるほか、『国造本紀』序文に「以天道根命、為紀伊国造」とあり、同じく『同』紀伊国造条(前掲)でも初代の紀伊国造とされている。また『姓氏録』河内国神別 紀直条(前掲)でも、カミムスヒの五世孫とされている。ナグサヒコは『国造次第』に「第五代、大名草彦命」とある。また『国造本紀』葛津立国造条(前掲)は、ナグサヒコの子のワカヒコを初代の葛津立国造としている。『姓氏録』和泉国神別 大村直条には、

大村直

紀直同祖。大名草彦命男根弥都弥命之後也。

とあり、ここではナグサヒコの子のキミツミを大村直の始祖としている。これらはいずれもナグサヒコを紀直氏の始祖と明記しているわけではないが、「紀直同祖」とあることから、ナグサヒコが紀直氏の系譜の中に位置づけられていたことがうかがえる。

ウジヒコは『国造次第』に「第六代、于遲比古」とある。また『記』孝元段には「木国造之祖、宇豆比古之」、『紀』景行三年二月庚寅条には「紀直遠祖菟道彦」、『丹生祝氏本系帳』には「神魂命(紀伊氏祖)、次最兄坐之宇遲比古命」と見えている。

アラカハトベは『記』崇神段に、

此天皇、娶木国造名荒河刀弁之女(刀弁二字以音)遠津年魚目目微比売、生御子、豊木入日子命。

とあり、紀伊国造のアラカハトベの女である遠津年魚目目微比売と、崇神天皇との間に豊木入日子命が所生したことを伝えている。また『紀』崇神元年二月丙寅条には、

又紀伊国荒河戸畔女遠津年魚眼眼妙媛、生豊城入彦命、豊鍬入姫命。

とある。ここではアラカハトベを紀伊国造と記してはいないが、『記』崇神段と同内容の系譜が見えている。¹⁾

チナソは『先代旧事本紀』巻五「天孫本紀」(以下『天孫本紀』)に、建斗米命。天戸目命之子。此命、紀伊国造智名曾妹中名草姫為妻、生六男一女。

とあり、紀伊国造として見えている。ここではチナソの妹の中名草姫と、建斗米命が婚姻して、六男一女を生んだと伝えている。

ミケモチは『姓氏録』和泉国神別紀直条(前掲)に、カミムスヒの子として見えている。また『神代本紀』には、

次神皇産霊尊。〈亦云神魂尊〉。

児天御食持命。〈紀伊直等祖〉。

とある。ここでもミケモチはカミムスヒの子とされ、紀直氏の始祖と位置づけられている。このうち『姓氏録』でミケモチを始祖としているのは、和泉国に居住する傍流の紀直氏であることからすれば、『神代本紀』に見える「紀伊直」も同様に和泉国の紀直氏を指していると思われる。

ワカヒコは『国造本紀』葛津立国造条(前掲)でナグサヒコの子として見え、初代の葛津立国造とされている。また『肥前国風土記』藤津郡能美郷条では、

能美郷。〈在郡東〉。昔者、纏向日代宮御宇天皇、行幸之時、此里有土蜘蛛三人。〈兄名大白、次名中白、弟名少白〉。此人等、造堡隱居、不肯降服。爾時、遣陪從紀直等祖穰日子、以且誅滅。於茲、大白等三人、但叩頭、陳己罪過、共乞更生。因曰能美郷。

とあり、景行天皇がこの地に巡幸した際、三人の土蜘蛛が従わなかったため、紀直氏の始祖であるワカヒコを派遣したところ、土蜘蛛の

一人が「叩頭て」謝罪して命乞いをしたことから、能美という地名が起ったという。この伝承では、ワカヒコを紀直氏の始祖と明記している。

以上が、紀直氏の始祖として諸史料に登場する人物(神格)である。

このうちアメノミチネ・ナグサヒコ・ウジヒコは『国造次第』に見えていることから、少なくともこれが成立した貞観十六年(八七四)、さらに言うならば『国造次第』の原史料が成立した段階における紀直氏の本宗において、自らに直接つながる始祖と認識されていたと考えられる。おそらく、カミムスヒもその延長線上にあるものと見てよいであろう。それに対してアラカハトベ・チナソは、紀伊国造とされているにもかかわらず『国造次第』に見えない。このことは一見すると、矛盾のようにも思われる。ただし、紀直氏が複数の系統によって構成されていたとするならば、²⁾両者は紀直氏の本宗の人々とは、別の系統の人々によって始祖と仰がれた人物であると解釈できる。また、ミケモチは和泉国の紀直氏にとつての始祖である。ワカヒコも紀伊国の紀直氏ではなく、葛津立国造を輩出した氏族にとつての「別祖」と理解できる。これらを整理すると、

a. 紀直氏の本宗にとつての始祖

カミムスヒ、アメノミチネ、ナグサヒコ、ウジヒコ

b. 紀直氏の本宗とは別の系統であるが、かつて紀伊国造を輩出したことのある系統にとつての始祖

アラカハトベ、チナソ

c. 紀直氏の本宗とは別の系統であり、しかも紀伊国造を輩出したことのない系統にとつての始祖

ミケモチ、ワカヒコ

という三種類に大別することが可能である。このことから紀直氏という集団が『国造次第』に記された本宗だけでなく、そこには登場

しない複数の系統の人々によって構成されていたことが分かる。まず、この点を確認しておきたい。

三 始祖の名義と初見年代

次に、これらの始祖の名義を概観するならば、その中に地名を冠するものが散見される。これに該当するのは、ナグサヒコ、ウジヒコ、アラカハトベ、キミツミ、ワカヒコである。

ナグサヒコの名前に含まれる「ナグサ」は、紀伊国名草郡の郡名に由来するものと思われる。ナグサという地名は行政区画としては現在残っており、名草山などに遺称を留めるのみであるが、所管する郷などから、古代の名草郡域は現在の和歌山市・海南市にほぼ相当すると考えられる。郡名としてのナグサは『続日本紀』(以下『統紀』と略記)大宝三年(七〇三)五月己亥条に、

令紀伊国奈我・名草二郡停布調献糸。但阿提・飯高・牟漏三郡献銀也。

と記されているのが初見である。年代は未詳であるが藤原宮出土木簡(飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報『六』)にも、

・名草郡□

・□□□

081

と記したものが見られる。また『統紀』神武即位前紀戊午年六月丁巳条には、

軍至名草邑。則誅名草戸畔者。〈戸畔。此云妬殺。〉(略)

と見えている。ここには「名草邑」とあることから、郡名に採用される以前よりナグサという地名が存在していたことがうかがえる。

ウジヒコの名前に含まれる「ウジ」は、和歌山県和歌山市宇治藪下・宇治家裏・宇治鉄砲場などを遺称地名とする。近接する新魚町

には宇治神社が鎮座しており、南西の西布教町・一筋目付近には交差点などの名称としても見える。『日本霊異記』上巻第五縁には、

大花位大部屋栖野古連公者、紀伊国名草郡宇治大伴連等先祖也。

天年澄情、重尊三寶。案本記曰(略)

と見えており、古代から紀伊国名草郡内の小地名として存在していたことが知られる。

アラカハトベの名前に含まれる「アラカハ」は、紀伊国那賀郡荒川郷に関連すると思われる。現在、アラカハという行政地名は残っていないが、紀の川市桃山町市場・桃山町元(旧那賀郡桃山町)に所在する学校などにその名を留めており、この付近に比定することができる。この地名は、平城宮出土木簡(『平城宮木簡』二二二六六)に、

・荒河郷酒米五斗

・賀美里

145・24・6 032

とあるのが初見である。この木簡には郷と里が記されていることから、木簡の年代は郷里制が施行されていた霊亀元年(天平十二年(七二五)七四〇)と推定される。また、天平十七(七四五)年九月二十一日「優婆塞貢進文」(『大日古』二五一一三二)にも、

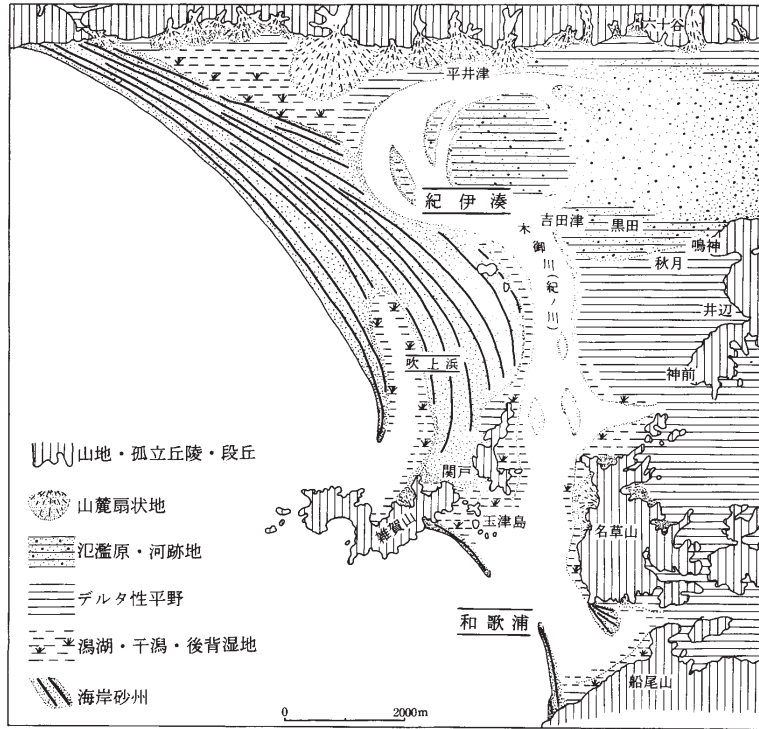
日置造石足。〈年十九。紀伊国名草郡荒川郷戸主日置造白麻呂戸

口。〉

と見えている。これらの史料から、アラカハという地名は八世紀初頭には那賀郡内に存在していたことが確認できる。

ワカヒコの名前に含まれる「ワカ」は、紀ノ川河口の景勝地である和歌浦の「ワカ」と共通している。この地名は、聖武天皇の紀伊行幸に従った山部赤人が詠んだ歌が、『万葉集』六一九一九に、

若の浦に潮満ち来れば 濁をなみ 葦辺をさして 鶴鳴き渡る
と見えている。また『統紀』神亀元年(七二四)十月壬寅条には、



【図2】古代における紀ノ川の流路

日下雅義『歴史時代の地形環境』(古今書院、一九八〇年)より転載。

賜造離宮司及紀伊国国郡司、并行宮側近高年七十已上禄各有差。百姓今年調庸、名草海部二郡田租咸免之。又赦罪人死罪已下。名草郡大領外従八位上紀直摩祖為国造、進位三階。少領正八位下大伴櫟津連子人。海部直土形二階。自餘五十二人各位一階。又詔曰、登山望海、此間最好。不勞遠行、足以遊覽。故改弱浜名、為明光浦。宜置守戸勿令荒穢。春秋二時、差遣官人、奠祭玉津嶋之神・明光浦之靈。

とあり、この行幸の際に聖武の命によって「弱浜^{わかひら}」の名を「明光浦^{あかのうら}」に改めさせたことが見えている。なお【図2】に示したように、古代の紀ノ川は現在の和歌川を本流として和歌浦に注いでおり、これが古代の名草郡と海部郡の境界であったと考えられている。和歌浦の地はその西岸に位置することから、海部郡に属していたことになる。

キミツミの名前に含まれる「キミ」は、『紀伊続風土記』によれば、和歌浦湾の南端に位置する毛見(現在の和歌山市毛見)に由来するという。この地名は、大治二年(一一二七)八月十七日「紀伊国在庁官人等解案」(『和歌山県史』古代史料一―四二四)に、西限同神領毛見内原東堺并海部境大江

とあるのが初見である。なお、平城宮出土木簡(『平城宮木簡』三一三〇七八)に、

〔海部〕部郡可太郷黒江里戸主神奴与止麻呂調塩三斗神亀五年九月

280・38・7 031

と記したものである。また、平城京出土木簡(『平城宮発掘調査出土木簡概報』三一―三〇下(四四五)にも、

□太郷黒江里御贄安除魚一斗 (157)・27・2 039

と記されている。ここに見える地名は海部郡可太郷黒江里と推定されるが、この地は現在の海南市黒江を遺称地名としており、上記し

た毛見に船尾山を挟んで東側に位置している。よって、毛見の地は古代には海部郡に所属していたことが分かる。

このうちウジヒコ・ナグサヒコ・アラカハトベの三者について、藺田香融氏は「ウジヒコは固有名詞ではなく、ウジ(和歌山市宇治)の有力族長を意味する一般的呼称」であり、「アラカハトベも、アラカハ(那賀郡荒川郷)の族長意味する一般的呼称」としたのに対し、「ナグサヒコは、ウジヒコやアラカハトベと肩を並べる存在で、古代の名草地域に君臨した首長一般を意味する呼称」と述べている。⁽¹³⁾ たしかに、磐余彦(『紀』神武即位前紀)や、若狭比古・塩治比古・大麻比古(『延喜式』神名帳 若狭国遠敷郡条・出雲国神門郡条・阿波国板野郡条)などを挙げるまでもなく、支配地域の地名を冠したと思われる人名・神名は少なくない。三者の名前と地名の関連については、藺田氏の見解は首肯すべきである。また、キミツミ・ワカヒコに関しても、ほぼ同様に理解して差し支えないであろう。

ただし問題は、なぜこれらの地名を冠する人物(神格)が紀直氏の始祖とされるに至ったのか、そして、それらは互いになかる関係にあったのか、という点にある。そこで、前節で整理した紀直氏の本宗にとっての始祖(カミムスヒ・アメノミチネ・ナグサヒコ・ウジヒコ)を考察対象として、次の二点について比較してみよう。

第一に、その名義である。ウジヒコとナグサヒコの場合は、いま述べたように地名を含んでいることからして、紀直氏とウジ地域・ナグサ地域との関係の中から登場した、現実世界の具体的な始祖であると言えることができる。それに対して、アメノミチネとカミムスヒはともに地名を含んでおらず、むしろ抽象的な名義となっている。このうちアメノミチネについては『先代旧事本紀』卷三『天神本紀』に、

天照太神詔曰、豊葦原之千秋長五百秋長之瑞穂国者、吾御子正

哉吾勝勝速日天押穗耳尊可知之国。知者治也。(略)正哉吾勝勝速天押穗耳尊奏曰、僕欲将降装束之間、所生之児。以此可降矣。詔而許之。(略)令三十二人並為防衛、天降供奉矣。(略)天道根命、川瀬造等祖。

とあり、天孫降臨に従った三十二柱の神々の中に名前が見えている。また、言うまでもないことではあるが、カミムスヒは『記』上巻の冒頭に、

天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。(訓高下天云阿麻。下效此。)次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

とあるように、天地開闢の時に高天原においてアメノミナカヌシ・タカミムスヒに続いて誕生した神造化三神の一である。このように、アメノミチネの「アメ」や、カミムスヒの「カミ」は、天上世界である高天原との関係性を示すものであり、実際に紀伊国に存在した地名を冠するウジヒコ・ナグサヒコとは、名義の上で一線を画していることと捉えることができる。

第二に、紀直氏の始祖としての初見年代である。まず、ウジヒコは『記』『紀』段階ですでに「木国造之祖」「紀直遠祖」と見えている。また『国造次第』のナグサヒコの尻付には「在山城国風土記」との注記が施されており、この注記が施された時点では『山城国風土記』は伝存していたと思われる。よって、確定的なことは言えないが、ナグサヒコを紀直氏の始祖とする所伝は『山城国風土記』に見えていた可能性がある。それに対して、アメノミチネは『姓氏録』段階になって初見する。カミムスヒは『記』『紀』に登場してはいるが、紀直氏と系譜上で結びつきが確認できるのは、やはり『姓氏録』の段階になってからである。

このように、ウジヒコは八世紀初頭には紀直氏の始祖とされてい

る。ナグサヒコについても、ほぼ同時期に紀直氏の始祖としてその名が見えていたと推測される。一方、アメノミチネやカミムスヒが紀直氏の始祖として初めて登場するのは、九世紀初頭になってからである。もちろん、それぞれの史料は性格が異なるため一概に比較することはできないのであり、各史料の原史料を考慮するならば初見年代はさらに遡ることになる。しかし、あくまで一つの目安とすることは許されるであろう。

そして、上記した二点は互いに連関している。すなわち、具体的な地名を冠するウジヒコ・ナグサヒコは八世紀段階に初見するのに対し、系譜で上位に置かれているアメノミチネ・カミムスヒはともに抽象的な名義であり、初見年代も九世紀段階にまで降るのである。これは、紀直氏の系譜がウジヒコ→ナグサヒコ→アメノミチネ→カミムスヒの順で形成されていたことを示唆するものである。次節では、紀直氏と同祖同族関係を結ぶ氏族とその分布を手がかりに、この点を検証することとしたい。

四 同族の分布

紀直氏の本宗が始祖と仰いだ四者のうち、ウジヒコの後裔を称するのは紀直氏ただ一氏のみである。それに対して、ナクサヒコ・アメノミチネ・カミムスヒについては、これらを始祖と位置づける多数の後裔氏族が『姓氏録』に記載されている。よって、ここでは『姓氏録』の記述を対象として、その氏族数と分布範囲の整理を行うこととする。

まず、ナグサヒコを介して紀直氏と同祖系譜を形成している氏族としては、『姓氏録』和泉国神別 大村直条（前掲）に見える大村直のほかに、計三氏を挙げることができる。

【和泉国神別】

直尻家

大村直同祖。

高野

大名草比古之後也。

このうちナクサヒコを直接の始祖とする氏族は、和泉国に高野氏が見られる。また、ナクサヒコにまで系譜を遡らせている氏族としては、同じく和泉国に大村直氏・直尻家氏が見られる。これら三氏はいずれも和泉国に居住している点で共通している。

次に、アメノミチネを介して紀直氏と同祖系譜を形成している氏族としては、『姓氏録』河内国神別 紀直条（前掲）に見える紀直氏のほかに十氏、つまり計十一氏を挙げることができる。

【和泉国神別】

物部連

神魂命五世孫天道根命之後也。

和山守首

同上。

和田首

同上。

高家首

同上。

川瀬造

神魂命五世孫天道根命之後也。

【河内国神別】

大村直田連

大村直同祖。天道根命之後也。

【大和国神別】

大坂直

天道根命之後也。

伊蘇志臣

滋野宿禰同祖。天道根命之後也。

【右京神別】

滋野宿禰

紀直同祖。神魂命五世孫天道根命之後也。

大村直

天道根命六世孫君積命之後也。

大家首

天道尼乃命孫比古摩夜真止乃命之後也。

このうちアメノミチネを直接の始祖とする氏族としては、和泉国に物部連氏・和山守首氏・和田首氏・高家首氏・川瀬造氏、河内国に紀直氏・大村直田連氏、大和国に大坂直氏・伊蘇志臣氏、右京に滋野宿禰氏が見られる。また、アメノミチネにまで系譜を遡らせている氏族には、右京に大村直氏・大家首氏が見える。これらの氏族は和泉国に五氏、河内国に二氏、大和国に二氏、右京に三氏が分布しており、前述したナグサヒコと比較するならば、その範囲が和泉国から拡大していることが分かる。

次に、カミムスヒを介して紀直氏と同祖系譜を形成している氏族としては、前節で触れた和泉国の紀直氏と、アメノミチネの項で挙げた同国の物部連氏・和山守首氏・和田首氏・高家首氏・川瀬造氏、右京の滋野宿禰のほかに二七氏、合計で三五氏を挙げることができ。少し長くなるが初出の氏族のみ掲げておく。

【和泉国神別】

爪工連

神魂命男多久豆玉命之後也。(略)

大庭造

神魂命八世孫天津麻良命之後也。

神直

同神五世孫生玉兄日子命之後也。

【和泉国未定雑姓】

工首

神魂命之後也。

【河内国神別】

多米連

神魂命児天石都倭居命之後也。

城原

同神五世孫大広目命之後也。

【大和国神別】

委文宿禰

出自神魂命之後大味宿禰也。

田辺宿禰

同神五世孫天日鷲命之後也。

多米宿禰

同神廿二世孫意保止命之後也。

【右京神別】

三島宿禰

神魂命十六世孫建日穗命之後也。

天語連

県大養宿禰同祖。神魂命七世孫天日鷲命之後也。

久米直

神魂命八世孫味日命之後也。

屋連

神御魂命十世孫天御行命之後也。

多米宿禰

同神五世孫天日鷲命之後也。（略）

波多門部造

神魂命十三世孫意富支閑連公之後也。

若倭部連

神魂命七世孫天筒草命之後也。

多米宿禰（逸文）

姓氏録云、多米宿禰、出自神魂命五世孫天日鷲命也。（略）

【左京神別】

県犬養宿禰

神魂命八世孫阿居太都命之後也。

大掠置始連

県犬甘同祖。

竹田連

神魂命十三世孫八束脛命之後也。

間人宿禰

神魂命五世孫玉櫛比古命之後也。

爪工連

神魂命子多久都玉命三世孫天仁木命之後也。

多米連

多米宿禰同祖。神魂命五世孫天日和志命之後也。（略）

【山城国神別】

賀茂県主

神魂命孫武津之身命之後也。

鴨県主

賀茂県主同祖。（略）

鴨県主本系（逸文）

賀茂県主同祖。神魂命孫武津之身命之後也。（略）

【摂津国神別】

多米連

神魂命五世孫天比和志命之後也。

犬養

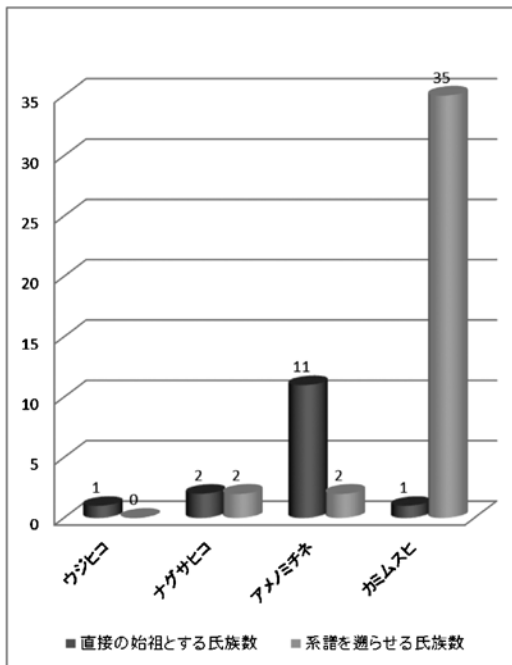
同神十九世孫田根連之後也。

目色部真時

同神十二世孫大見尼之後也。

このうちカミムスヒを直接の始祖とする氏族は、和泉国の工首氏が唯一である。そのほかの三四氏は、全てカミムスヒにまで系譜を遡らせる形で言及している。これらの氏族の分布地域は和泉国に十氏、河内国に三氏、大和国に三氏、右京に八氏、左京に六氏、山城

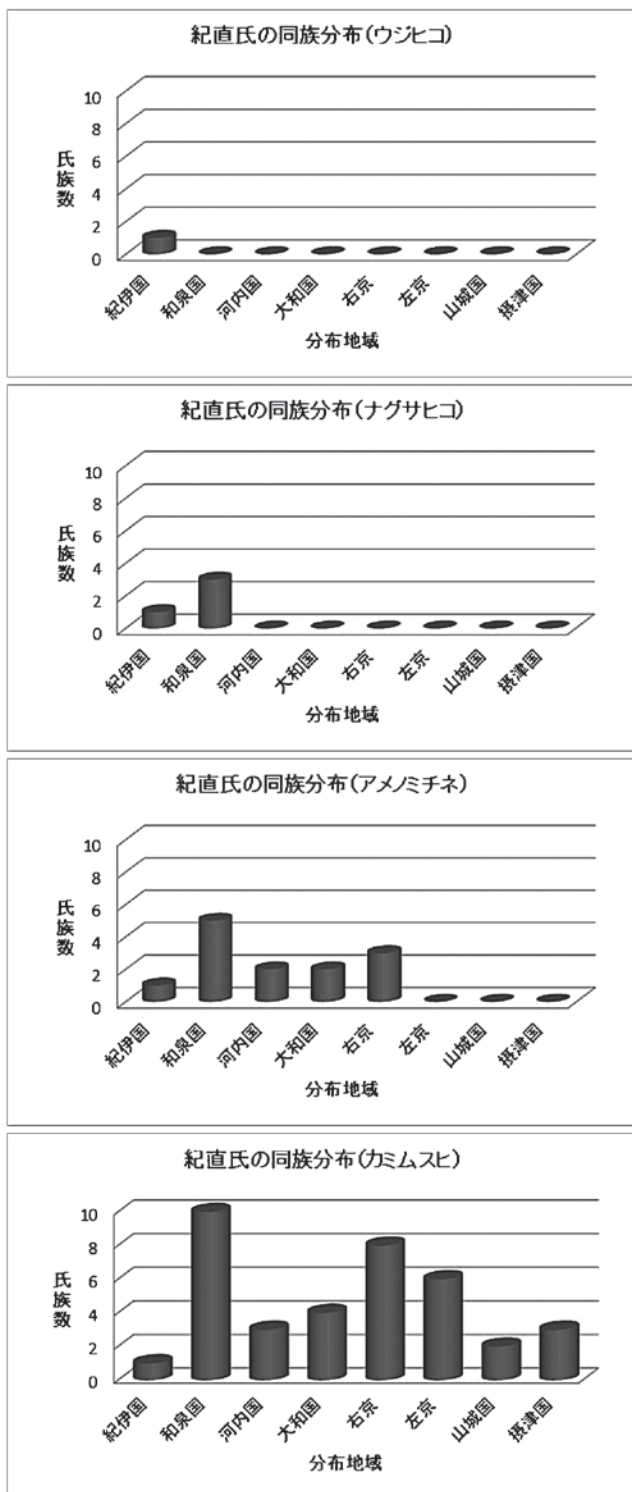
【表1】紀直氏の同族数



国に二氏、摂津国に三氏となっており、ナグサヒコ・アメノミチネと比べるならば、その範囲が格段に広がっていることが確認できる。

以上、『姓氏録』を対象として、紀直氏と同祖系譜を形成している氏族がウジヒコ・ナグサヒコ・アメノミチネ・カミムスヒのいずれを共通の始祖としているか、また、どの地域に分布しているかを確認した。これに第一節で言及した河内国・和泉国の紀直氏を加えて、改めて整理したものが【表1】【表2】である。これによれば、ウジヒコを始祖とする氏族は紀直氏の一族のみであり、分布地域は紀伊国に限定される。ナグサヒコを始祖とする氏族は計四氏（直接の始祖とする氏族は二氏、系譜を遡らせる氏族は二氏）が見られ、そ

【表2】紀直氏の同族分布



の分布範囲は紀伊国に加えて和泉国に広がる。アメノミチネを始祖とする氏族は計十二氏（直接の始祖とする氏族一〇は、系譜を遡らせる氏族は二氏）が見られ、その分布範囲は紀伊国・和泉国・河内国・大和国・右京へと拡大を見せる。カミムスヒを始祖とする氏族は計三六氏（直接の始祖とする氏族は一氏、系譜を遡らせる氏族は三五氏）を数え、その分布範囲は紀伊国・和泉国・河内国・大和国・右京・左京・山城国・摂津国となり、最も広範囲に及んでいる。

よって、ウジヒコ→ナグサヒコ→アメノミチネ→カミムスヒの順で、これらを始祖として同祖系譜を形成する氏族の数が増加し、さらに紀直氏の本拠地である紀伊国から畿内の隣接する国々へと分布

地域が拡大する、という傾向を看取することができる。このことは、やはり紀直氏の系譜がウジヒコ→ナグサヒコ→アメノミチネ→カミムスヒの順で形成されていったとする先の推測を裏付けるものである。

五 ウジヒコの創出とその背景

これまで見てきた始祖の名義および初見年代と、同祖系譜を形成する氏族数・分布地域を踏まえて、四者が紀直氏の始祖とされるに至った経緯を具体的に明らかにしたい。

まず、ウジヒコについてである。「ウジ」という地名を冠している以上、その人格（神格）が現実のウジ地域と密接な関わりを持っていることは間違いない。この地域は、現在も紀ノ川の河道に面しており、紀の国大橋と北島橋が架けられる渡河点となっているが、古代においてはより重要な位置を占めていたと考えられる。前掲した【図2】に示したように、古代の紀ノ川は延時・狐島・土入付近で流路を南に大きく変化させ、現在の和歌川を本流として和歌浦に注いでいたと推定されている。この旧河道の屈曲部から河口にかけての一带は、『紀』神功皇后摂政元年二月条に、

時皇后聞忍熊王起師以待之。命武内宿禰懷皇子。横出南海泊于紀伊水門。

とあり、『紀』応神九年四月条にも、

時武内宿禰。獨大悲之。窃避筑紫浮海。以從南海廻之。泊於紀水門。

とあるように「紀伊水門」と呼ばれており、船団が停泊できる規模の港湾施設が存在していたことが知られる。⁽¹⁶⁾ また、『紀』仲哀二年三月丁卯条には、

天皇巡狩南国。（略）至紀伊国而居于德勒津宮。当是時、熊襲叛之不朝貢。天皇於是將討熊襲國。則自德勒津發之、浮海而幸穴門。

とあり、紀伊国には港津と一体となった行宮が営まれていたとも伝えられている。ここに見える「德勒津」は、現在の和歌山市新在家付近に比定されている。⁽¹⁷⁾ これら『記』『紀』の記事内容は伝承の域を出るものではないが、そこに見られる紀伊水門や德勒津などの固有地名については、少なくとも『記』『紀』編纂当時、おそらくは大化前代のあり方がある程度伝えていっていると見てよいであろう。さらに、永承四年（一〇四九）八月二十一日「紀伊国名草郡許院収納米帳簿進未勘文」には「吉田津」と「平井津」が見えており、⁽¹⁸⁾ それぞれ現在の和歌山市吉田・平井を遺称地名としている。

これらの各施設が、いかなる相互関係にあったのかは未詳である。ただし、古代における「水門」とは、たとえば武庫川の河口を「務古水門」（『紀』神功摂政元年二月条）、加古川の河口を「鹿子水門」（『紀』応神十三年九月条一云）と言うように、大型河川の河口部を広く指して用いられている。このことから類推するに、德勒津・吉田津・平井津など、紀ノ川の河口地域に点在する諸施設を包括的に表現したものが、紀伊水門であったと理解できる。そして、ウジ地域はまさに紀伊水門の中心部とも言える、紀ノ川旧河道の突端部の内側に位置している。ここから川を下れば、紀直氏が奉祭する日前宮（和歌山市秋月）とも至近距離にある。また、紀ノ川の旧河道は古代の名草郡と海部郡の境界をなしており、その意味でウジ地域は海人集団の世界との接点でもあった。これらのことからすれば、ウジ地域は古代における河川交通の要衝であり、紀ノ川河口地域一帯に影響力を及ぼす上で重要な意味を持っていたと思われる。まさにウジ地域を制した者が、紀ノ川河口地域一帯を制するのであり、お

そらくはこの地域をおさえた集団こそが、のちに紀直氏という氏族が形成される過程で、その中心勢力へと成長するに至ったと推測されるのである。⁽¹⁹⁾ こうした経緯から、紀直氏（の前身集団）はウジ地域の地名を冠するウジヒコを、自らの始祖として仰ぐようになったのであろう。言い換えるならば、ウジヒコという始祖は、紀直氏（の前身集団）がウジ地域を中心として活動を行っていた頃に創出されたと考えることができる。

その時期は、ウジヒコが『記』『紀』に紀直氏の始祖として見えていることから、少なくとも両書の編纂段階を遡ることは確実である。それ以上のことについては、文献史料から実年代を特定することは困難であり、考古資料を参照して推測することになるが、ここでは鳴滝遺跡の巨大倉庫群（和歌山市善明寺）に注目したい。⁽²⁰⁾ 周知の通り、この倉庫群は五世紀前半の時期に建設されたもので、合計七棟で構成され、いずれも桁行四間・梁行四間をはかる高床式の総柱建物である。床面積は大きい棟で約八〇㎡もあり、七棟合計では約四五〇㎡にも及んでいる。和泉山脈から南に延びる小高い尾根上の平坦部にあり、前述した紀ノ川の旧河道や平井津にも近接している。

この倉庫群の性格および造営主体について、これまでの議論を整理するならば、主に紀伊の在地勢力との関係を重視する立場と、ヤマト王権との関係を重視する立場とに大別することができる。⁽²¹⁾ 近年では、栄原永遠男氏が後者の立場を踏まえて、ヤマト王権の意向のもとに紀伊の在地勢力が造営を担当した、対外交渉のための「兵站基地」であるとの見方を提示している。⁽²²⁾ 詳しい検討は別の機会に譲ることとしたいが、たしかに物資の収蔵を目的とした通常の倉庫群であるならば、より紀ノ川の河道に近接した場所に築造した方が、交通の便からしても好都合なはずである。にもかかわらず、紀伊水

門を見下ろす丘陵上を選んで建てられていることからすれば、そこには軍事的な目的を想定する必要がある、ヤマト王権の対外交渉との関連は否定できない。よって、筆者も栄原氏の見解に賛同したい。もともと、鳴滝遺跡の倉庫群では、出土遺物に時代幅が認められず、さらにいずれの建物にも建て替えの痕跡が認められないことから、比較的短期間で廃絶した可能性が指摘されている。そして、これに取って代わるように、五世紀後半には難波津に近接して法円坂遺跡の倉庫群（大阪府大阪市中央府法円坂町）が建設されている。この法円坂倉庫群は合計十六棟、総床面積約一四〇〇㎡にも及ぶ巨大なもので、鳴滝遺跡の倉庫群をはるかに凌ぐ規模であることから、紀伊水門は五世紀後半にはヤマト王権の拠点としての役割を失い、その機能は難波津へ吸収されたと考えられている。ただし、それはあくまでヤマト王権にとつての位置づけに変化が生じたに過ぎない。

その後もこの地域には、五世紀中葉には車駕の古址古墳（和歌山市木ノ本）、五世紀後半には大谷古墳（和歌山市大谷）が継続的に築造されている。前者は全長約一二〇mの前方後円墳であり、埴輪やガラス製小玉とともに中空の金製勾玉が出土している。一方、後者は全長約七〇mの前方後円墳であり、埴輪や武具・装飾具・農具とともに、金銅製の馬冑・馬甲をはじめとする装馬具が出土している。これらの金製曲玉や金銅製馬冑・馬甲は、朝鮮半島との関わりが指摘されており、古墳の被葬者が対外交渉に關与していたことをうかがわせる。当該地域の集団にとつて紀伊水門は、引き続き対外交渉の拠点として機能していたと思われる。

以上のことからすれば、ヤマト王権によって紀伊水門がクローズアップされた五世紀前半は、この地域に存在していた集団にとつても大きな画期となったに違いない。紀直氏（の前身集団）は、この時期にヤマト王権との交流を開始したことで、ウジ地域を拠点とし

て紀伊水門の河川交通と海上交通を掌握するに至り、そのことがこの地域一帯に存在した集団の中で主導的な立場を確立する重要な契機になったのではなからうか。そして、五世紀後半に至っても紀伊水門を拠点として、対外交渉に関与し続けたと見られる。こうした時期こそ、ウジヒコが紀直氏の始祖としての地位を獲得するのに相応しいと言える。したがって、紀直氏（の前身集団）が紀伊水門の中心部の地名を冠したウジヒコを始祖として仰ぐようになったのは、およそ五世紀代と考えることができる。

なお、付言しておくならば、ウジヒコという始祖が創出されたとは言っても、王統譜へのつながりや奉事根源を含むのちの氏族系譜のような形は、この時期には当然ながら存在していなかったであろう。おそらくは、ウジ地域を拠点にかつて活躍した複数の人物の記憶が、ウジ地域との関係性の中で、一つの人格に漠然と象徴化されていく段階にあったと推測される。

六 ナグサヒコの創出とその背景

前述したように、ウジヒコの「ウジ」は名草郡内の小地名に由来するのに対し、ナグサヒコの「ナグサ」は名草郡の郡名に共通する。また、紀直氏と他氏族との間には、ウジヒコを介した同祖系譜は全く形成されていないが、ナグサヒコを介して同祖系譜を形成する氏族は、紀伊国のみならず、これに北接する和泉国にも分布している。これらのことからすれば、両者が冠している地名としてのウジ・ナグサは、それぞれ紀直氏の勢力範囲と対応しているとの推測が成り立つ。すなわち、紀直氏がウジ地域に拠点を置いて活動を行っていた五世紀代に始祖と仰がれていたのがウジヒコであったのに対して、その後、この集団がのちの名草郡域一帯にまで勢力を拡大し、その

周辺地域の氏族とも交流を行うようになった段階で登場してきた始祖が、ナグサヒコであると考えられるのである。

詳細は先稿を参照されたいが、『国造次第』の忍穂尻付には、

第十九 大山上忍穂（忍勝男。立名草郡兼大領。）

とある。この記述からは、名草郡⁽²⁵⁾が立てられたとされる七世紀中頃には、のちの郡域に相当する広範囲を指す呼称として、ナグサという地名が定着していたことが分かる。また、紀直氏の人物が名草郡を立てたということは、言い換えるならば紀直氏の勢力範囲を名草郡としたということであり、立郡の時点で紀直氏の勢力が名草郡域一帯に及んでいたことは間違いない。では、この状況はいつにまで遡れるのであろうか。

この点については、紀伊国における屯倉の設置記事が手がかりを与えてくれる。『紀』安閑二年（五三五）甲寅条には、

置（略）紀国経湍屯倉。〔経湍、此云俯世。〕河辺屯倉。

とあり、また『同』欽明十七年（五五六）十月条には、

遣蘇我大臣稻目宿禰等（略）紀国置海部屯倉。

とあるように、紀伊国に経湍・河辺・海部の三屯倉が設置されたことが見えている。ここに見える安閑二年・欽明十七年という年紀を、そのまま史実と受け取るとは難しいが、紀伊国の屯倉がおおむね六世紀中頃に設置されたことは認めてよいであろう⁽²⁶⁾。

屯倉に関する先行研究は枚挙に暇がないが、近年の研究動向を踏まえるならば、それは多様な物資や人的資源の貢納を行うために設けられた、ヤマト王権の政治的軍事的拠点であると理解することができ⁽²⁷⁾。また『紀』大化元年（六四五）八月庚子条に掲載された東国国司詔の一節には、

若有求名之人、元非国造・伴造・県稻置、而輒詐訴言、自我祖時、領此官家、治是郡県、汝等国司、不得随詐使牒於朝。審得

実状而後可申。

とあり、国造でない者が祖先の代より屯倉を管理してきたと虚偽の訴えをする場合のあったことが知られる。この記事からは逆に、国造が屯倉を掌る存在であったことが読み取れる。また、磐井の乱〔紀〕継体二十二年(五二八)十二月条や、武蔵国造の乱〔同〕安閑元年(五三四)閏十二月条などでは、ともに国造の任命と屯倉の献上が連動して行われている。これらの事例から、紀伊国でも上記の屯倉が設置されるにともなう、国造制が施行されたと考えられる。

冒頭でも少し触れたが『紀』敏達十二年(五八三)七月丁酉条・十月条には、

是以朕当奉助神謀、復興任那。今在百済火葦北国造阿利斯登子達率日羅、賢而有勇。故朕欲与其人相計。乃遣紀国造押勝与吉備海部直羽嶋、喚於百済。(略)紀国造押勝等、還自百済。復命於朝曰、百済国主、奉惜日羅、不肯聽上。

とあり、ここでは「紀国造押勝」と記されている。これ以前の紀直氏の人物については、「紀直遠祖菟道彦」〔紀〕景行三年二月庚寅条、「木国造之祖宇豆比古」〔記〕孝元段、「紀直祖豊耳」〔紀〕神功摂政元年二月条などがあり、いずれも「祖」として登場するのに対し、上記の押勝にはその肩書きが付されていない。よって、少なくとも押勝が生存した六世紀中頃には、紀伊国に国造制が敷かれていたことが確認できる。そして、この時期は紀伊国に屯倉が設置された時期とも整合する。つまり、六世紀中頃に紀伊国に経湍・河辺・海部などの屯倉が設置されたことにともない、この地域の最有力勢力である紀直氏を率いていた人物が紀伊国造に任命されたと考えることができる。

さて、上記した三屯倉のうち経湍・河辺屯倉は、現在の和歌山市

布施屋・川辺を遺称地名とする。紀ノ川を挟んで布施屋は南岸、川辺は北岸に位置している。この付近は和泉国から雄山峠を超えて紀伊国に入るルートと、大和国から紀ノ川を下って紀伊国に至るルートが交わる場所である。布施屋とは税物の運搬夫や旅行者のための宿泊・救護施設であり、そのことからこの地が交通の要衝であったことが分かる。また、海部屯倉はのちの名草郡大宅郷の地にあったとされ、現在の和歌山市手平に比定されている。この地は紀ノ川の旧河道の東岸に当たり、前述した紀伊水門の下流に位置している。おそらく、海岸部からの貢納物(物資だけでなく人的資源も含む)は海部屯倉へ、平野部・山間部の貢納物は経湍・河辺屯倉に集められ、陸上交通と河川交通を臨機応変に使い分けて目的地へ運ばれたと思われる。

こうした立地を踏まえて榮原氏は、ヤマト王権が紀直氏の勢力範囲を東西から押さえ込む地点に屯倉を設置し、それぞれ紀ノ川中流域や海岸部の勢力と紀直氏との「分断をはかった」可能性を指摘している。⁽³⁰⁾しかし、屯倉の設置を必ずしも紀直氏とヤマト王権の対立軸で捉える必要はない。なぜなら、各地域の氏族がヤマト王権の支配体制に参画することには、大王家や中央氏族とのパイプを形成すること、自らの勢力範囲に対する影響力を強化する狙いもあったと見られるからである。⁽³¹⁾

むしろ、ここで注目すべきなのは、次の二点である。それは第一に、前述の通り国造が屯倉の管理を行っていたならば、経湍・河辺・海部の三屯倉が置かれた段階で、紀伊国造に任命された紀直氏の勢力が各屯倉の付近にまで及んでいなければ、屯倉は貢納奉仕の拠点として機能し得ないということである。第二に、経湍・河辺はのちの名草郡域の東端に程近い場所に位置し、海部屯倉は後の名草郡域の西端部に設置されていることである。これらのことから、紀伊国

に屯倉が設置された六世紀中頃には、紀直氏の勢力はのちの名草郡域にほぼ相当する範囲にまで展開していたことがうかがえる。この段階に至って、紀直氏はウジ地域を拠点とした小集団としてではなく、ナグサ地域を代表する最有力勢力として、周辺地域と接触・交流を開始したと考えられる。

それは、ナグサヒコを介した同祖系譜からも裏付けることができ。まず、ナグサヒコを直接の始祖としている氏族としては、『姓氏録』に高野氏が見える。この氏族の本拠地は、和泉国日根郡（現在の大阪府泉南市信達市場付近）にあったとされている。この地域は、経湍・河辺屯倉の所在地付近から雄山峠を通じて和泉山脈を抜け、大阪平野の南端に出た場所に当たる。つまり、紀直氏が陸路を選択して和泉国に入った時に、最初に通るのがこの高野氏の本拠地なのである。こうした交通を媒介として、高野氏は紀直氏と同じくナグサヒコの後裔を称するようになったと考えられる。両氏の同祖系譜がナグサヒコを介して結びついているということは、紀直氏がナグサ地域を代表する勢力となった段階で、その関係が形成されたことを物語っている。

次に、ナグサヒコにまで系譜を遡らせている氏族としては、『国造本紀』に葛津立国造、『姓氏録』に大村直氏・直尻家氏が見える。このうち葛津立国造については、『日本三代実録』（以下『三実』）貞観八年（八六六）七月十五日条に「藤津郡領葛津貞津」の名前が見えていることから、これを輩出したのは葛津氏であったと推定される。葛津氏の「フジツ」は、現在の佐賀県藤津郡を遺称地名とする。肥前国は紀伊国とは地理的に隔絶しているが、冒頭でも触れたように、葛津氏は紀直氏と海上交通によって結びついていたと思われる。「フジツ」という名義からも、港津との関連がうかがえる。一方、大村直氏は和泉国大鳥郡大村郷（現在の大阪府堺市南区高蔵

寺付近）が本拠であったと思われる。直尻家氏の拠点は不明であるが、『姓氏録』で大村直と全く同じ系譜を称していたことからすれば、おそらく両氏はかなり近い関係にあり、居所も近接していたであろう。両氏の本拠地は石津川によって大阪湾と結ばれており、さらに古代の大阪湾の海岸線がより内側まで入り込んでいたと推定されている。よって、葛津氏と同様、大村直氏・直尻家氏も海上交通によって紀直氏との間に交流を持っていた可能性がある。

これらの氏族が海路によって紀伊国に至る際には、まず紀ノ川河口部に到着しなければならないが、この地域は海上交通と河川交通の結節点であり、名草郡域に勢力を持っていた紀直氏にとって、紀伊水道への玄関口に当たる。とするならば、上記三氏の氏族の始祖であるワカヒコ・キミツミが、和歌浦の「ワカ」や、毛見に由来する「キミ」を冠しており、かつ系譜の上でナグサヒコの子として位置づけられていることは看過できない。おそらくは、ウジ地域を本拠とする紀直氏がウジヒコを始祖としたように、ワカ地域にはワカヒコを、キミ地域にはキミツミを、それぞれ始祖とする小集団が五世紀代には存在しており、葛津氏・大村直氏・直尻家氏らが海路で紀ノ川河口地域に至った際、まずはこれらの小集団と接触して、互いに始祖を共有するようになったのではなからうか。そして、これらの小集団が、名草郡域から勢力を拡大してきた紀直氏の影響下に組み込まれた際、ワカヒコ・キミツミをナグサヒコの子として位置づけたことによって、紀直氏と葛津氏・大村直氏・直尻家氏との間に同祖系譜が形成されるに至ったと考えられるのである。

また、同じく名草郡域周辺の地名を冠するものとして、那賀郡荒川郷の「アラカハ」に関連するアラカハトベがいる。現状では、アラカハトベとナグサヒコの系譜関係は不明である。ただし、先の事例から類推するならば、このアラカハ地域にもアラカハトベを始祖

とする小集団が存在しており、この小集団はナグサ地域一帯に勢力を伸ばした紀直氏と接触し、やがてその勢力下に入ったと推察される。現在、その系譜関係は伝えられていないが、おそらくアラカハトベもナグサヒコの子として位置づけられていたであろう。

以上、紀伊国に設置された三つの屯倉が、のちの名草郡域の東端・西端に位置しており、また、のちの名草郡域に接する和泉国日根郡の氏族や、海部郡・那賀郡に拠点を持つ小集団が系譜の上でナグサヒコに結びついていることを踏まえるならば、紀直氏がのちの名草郡域にまで勢力を拡大し、この地域を代表する勢力として周辺地域と接触・交流を行うようになった段階で登場してきた始祖が、ナグサヒコであると考えられる。その時期は、早ければ六世紀中頃と想定される。

なお、これまでナグサヒコはウジヒコ・アラカハトベと「肩を並べる存在」であり、「古代名草郡に盤踞した紀直氏の最も本来的な祖先」であったとされてきた。⁽²²⁾しかし、上記の結論を踏まえるならば、ウジヒコを始祖と仰ぐ小集団が、のちの名草郡域一帯にまで勢力を拡大し、周辺地域の小集団と同祖系譜を形成するため、その上の世代に架上されたのがナグサヒコである。その意味において、のちに紀直氏の本宗につながる小集団が最初に始祖としていたのはウジヒコであったと言える。『記』『紀』段階において、依然として紀直氏の始祖がウジヒコとされていることも、その傍証となるであろう。

七 アメノミチネとカミムスヒの架上

ウジヒコ・ナグサヒコとは異なり、アメノミチネはその名義に地名を含んでおらず、特定地域との関係性はうかがえない。また、アメノミチネの後裔氏族は合計一二氏族を数え、その分布地域も紀伊

国に留まらず、和泉国・河内国・大和国・右京に及んでいる。これをウジヒコ・ナグサヒコの場合と比較するならば、氏族数が増加し、分布地域が拡大していることが分かる。とするならば、紀直氏がアメノミチネを始祖として位置付けるようになったのは、ウジヒコやナグサヒコを始祖としていた段階より遅れて、もはや特定地域の地名を冠する始祖では、同祖系譜を形成する諸氏族の紐帯となり得ないほど、広範囲の諸氏族と関係を持つようになった段階と考えられる。

アメノミチネという名義について、藺田氏は「国造家の奉斎する日前宮が国家的な崇敬を獲得し、その祭神の「天降りましし時」が説かれねばならなかった段階において案出されたのが、このみやびやかだが空疎な「天道根」という名であった」と述べている。⁽²³⁾前述の通り「アメ」は高天原との関係を示していると思われるが、「アメ」「ミチ」「ネ」という語句は、いずれも固有名詞ではなく具体性に欠ける。よって、藺田氏の指摘は妥当であると言える。では、紀直氏がアメノミチネを始祖と仰ぐようになったのは、いつの時期であろうか。

改めて言うまでもないが、紀直氏は日前宮を奉祭している。この神宮の祭神は、現在それぞれ日前大神・国懸大神とされているが、『紀』神代第七段一書第一には、

故天照大神謂素戔鳴尊曰、汝猶有黒心。不欲与汝相見。乃入于天石窟而閉著磐戸焉。於是天下恒闇。無復昼夜之殊。故會八千萬神於天高市而問之。時有高皇產靈之息思兼神云者。有思慮之智。乃思而白曰、宜図造彼神之象而奉招禱也。故即以石凝姥爲治工、採天香山之金、以作日矛。又全剥眞名鹿之皮、以作天羽韁。用此奉造之神、是即紀伊国所坐日前神也。

とある。これはいわゆる天磐戸神話である。ここでは、天照大神が

素戔鳴尊の所業に怒って磐戸に閉じこもってしまったため、思兼神の提案によって日矛と天羽輪を作り、さらにこれを使って天照大神の姿を象った神宝を鑄造したとあり、その神宝を祭ったのが「紀伊国所坐日前神」であると伝えている³⁴。この記事が日前神の初見となる。一方、国懸神については『紀』朱鳥元年(六八六)七月癸卯条に、

奉幣於居紀伊国国懸神、飛鳥四社、住吉大神。

とあり、ここに「紀伊国国懸神」に奉幣したとあるのが初見である。

また『同』持統六年(六九二)五月庚寅条には、

遣使者奉幣于四所伊勢、大倭、住吉、紀伊大神。告以新宮。

とあり、「紀伊大神」に使者を派遣して奉幣を行っている。『同』持統六年十二月甲申条にも、

遣大夫等奉新羅調於五社。伊勢。住吉。紀伊。大倭。菟名足。

とあり、「紀伊社」に新羅調が献納されたことが記されている。ここに用いられている「紀伊大神」「紀伊社」との表現は、両神宮を総称したものであろう。

これらの記事によれば、七世紀末頃から朝廷から日前宮への奉幣が行われていることが確認できる。これを踏まえて松前健氏は、日前宮が「朝廷に關係を持って来たのは、天武・持統朝であった」と述べている³⁵。天磐戸神話の中に「紀伊国所坐日前神」が位置づけられ、それが『紀』に載録されたことも、こうした朝廷による奉幣の開始と無関係ではないであろう。そして、紀直氏が奉祭する日前宮の神威が高まりを見せるとともに、紀直氏と同祖系譜を形成する氏族も増加していったと考えられる。

アメノミチネを始祖としている氏族のうち、たとえば和泉国の和田首氏の本地地は、和泉国大鳥郡和田郷であったと見られるが、この地は現在の大阪府堺市南区和田を遺称地名としており、前述した和泉国の大村直氏の本拠地に程近い場所にある。また、河内国の大

村直田連氏や右京の大村直氏は、和泉国の大村直氏と同族關係にある。さらに『三集』貞觀元年(八五九)十二月廿二日条には、

從四位上行攝津守滋野朝臣貞雄卒。貞雄者、右京人也。父從五位上家記、延曆十七年改伊蘇志臣、賜滋野宿祢。

とあるように、延曆十七年(七九八)には伊蘇志臣氏の一部が滋野宿禰姓へと改姓しており、両者は元を辿れば同一の氏族であったことが分かる。

このようにアメノミチネを始祖とする氏族の中には、ナグサヒコを始祖とする氏族と本地地が近接している事例や、互いに同族關係にある事例が見受けられる。このことから、アメノミチネを介した同祖系譜はもはや紀直氏との直接的な接触・交流ではなく、和泉・河内・大和各国と右京に分布する氏族間の關係を背景として、広範囲に展開していったことがうかがえる。こうして形成された同祖關係においては、ウジヒコやナグサヒコのように紀伊国の具体的かつ現実的な地名を冠する始祖ではなく、日前宮の由緒を体現した始祖が必要とされたに違いない。それこそが、高天原を舞台とした天磐戸神話との関連性を示す「アメ」を冠したアメノミチネであったと考えられる。なお、このアメノミチネが創出された時期を明確に特定することは、これ以上の手がかりが残されていないため難しいが、上記したように朝廷による日前宮への奉幣が七世紀末頃より開始されていることからすれば、この時期を一つの画期として、おおよそ八世紀前半には紀直氏の系譜に架上され、定着したものと理解しておきたい。

最後に、カミムスヒを介して紀直氏と同祖系譜を形成する氏族は、合計三六氏に上り、『姓氏録』が掲載する全範圍(山城・大和・河内・摂津・和泉各国と左右京)に分布している。ウジヒコ・ナグサヒコ・アメノミチネと比較するならば、同祖系譜を形成する氏族の数は最

も多く、その分布範囲も最も広範囲に亘っている。このうち大庭造氏の本拠地は、現在の大阪府堺市南区大庭寺を遺称地名とする。また、神直氏は和泉国大鳥郡上神郷を本拠としたと思われ、この地は現在の大阪府堺市南区片蔵(旧大鳥郡上神谷村付近)に比定されている。これらは前述した大村直氏・和田首氏の本拠地と近接していることから、各氏の間における地域的なつながりによって、系譜が結びつけられたケースと考えられる。

また、大和・河内・摂津各国と左右京に分布する多米連氏・多米宿禰氏、摂津国と左京に分布する県犬養宿禰氏・犬養氏、山城国に分布する賀茂県主氏・鴨県主氏は、それぞれ同族であると見られ、各氏族の間で系譜が結びついた可能性が高い。

ただし、カミムスヒを直接の始祖とする氏族は工首氏のみであり、残りの三三氏族は全てその系譜を遡らせる形でカミムスヒにながっている。このことは、これらの諸氏族が本来的にカミムスヒを始祖としていたのではなく、その系譜が後次的にカミムスヒへ結びつけられたことを示唆するものである。これに関連して注目したのは、平安時代初期に登場した「倭漢惣歴帝譜図」である。『日本後紀』大同四年(八〇九)二月辛亥条には、

勅、倭漢惣歴帝譜図、天御中主尊標為始祖、至如魯王・呉王・高麗王・漢高祖命等、接其後裔。倭漢雜糅、敢垢天宗。愚民迷執、輒謂実録。宜諸司官人等所藏皆進。若有挾情隱匿、乖旨不進者、事覺之日、必処重科。

とあり、自氏の系譜をアメノミナカスヒに結びつけようとする動きのあったことが知られる。ここに見える「倭漢惣歴帝譜図」がいかなる書物であったかは不明であり、主として渡来系氏族に関するものと見るのが一般的である。しかし、こうした動きは『姓氏録』序文にも、

勝宝年中、時之恩旨、聽許諸蕃、任願賜之。遂使前姓後姓文字斯同、蕃俗和俗氏族相疑、万方庶氏、陳高貴之枝葉。三韓蕃賓、称日本之神胤。

とあるように、すでに天平勝宝年間(七四九～七五七)には始まっていたことが分かる。そして、氏姓や系譜における混乱は、必ずしも渡来系氏族に限ったことではなかったと思われる。たとえば、アメノミナカスヒと同じく造化三神の一であるタカミムスヒを取り上げるならば、『記』『紀』段階でタカミムスヒの後裔を称する氏族は見られないのに対し、『姓氏録』段階では左京に五氏、右京に六氏、大和国に二氏、摂津国に一氏、河内国に五氏、和泉国に一氏、合計で二十氏に上っている。

これらを踏まえるならば、造化三神などに系譜を遡及させる動きは、八世紀後半から九世紀初頭において諸氏の間で広く見られたものと推測されるのであり、カミムスヒに対しても自氏の系譜をつなげようとする氏族が増加した可能性は十分にあると言える。『記』『紀』において明確な祖先伝承を有していなかった紀直氏も、おそらくはこうした動きに連動して、それまで始祖としていたアメノミチネをカミムスヒの五世孫として位置づけ、自らの系譜と神統譜とを結びつけたのであろう。もともと、その際になぜカミムスヒが選ばれたのかは、現在のところ未詳とせざるを得ない。ただし、いずれにしてもカミムスヒを介した同祖系譜は、一部は各氏族での地域的なつながりによって系譜を共有する場合もあったと思われるが、その大半は八世紀後半から九世紀初頭における氏族の動向を背景として、紀直氏とは直接関係のないところで形成されたと考えられるのである。

八 結 語

以上、紀直氏の始祖とされている人物(神格)や、それを取り巻く同祖系譜を手がかりに、紀直氏の成立と展開について考察を加えてきた。内容が多岐に亘ったので、最後に論旨をまとめておきたい。紀直氏の始祖としては、①カミムスビ、②アメノミチネ、③ナグサヒコ、④ウジヒコ、⑤アラカハトベ、⑥チナソ、⑦キミツミ、⑧ワカヒコが挙げられる。これらは、紀直氏の本宗にとつての始祖(①～④)、紀直氏の本宗とは別の系統であるが、かつて紀伊国造を輩出したことのある系統にとつての始祖(⑤・⑥)、紀直氏の本宗とは別の系統で、紀伊国造を輩出したことのない、いわゆる傍流にとつての始祖(⑦・⑧)に大別することができる。このうち①～④を対象として、(i)名義、(ii)紀直氏の始祖としての初見年代、(iii)その人物(神格)を介して同祖系譜を形成する氏族数と分布地域、これら三点について比較を行った。

まず、(i)については、ナグサヒコの「ナグサ」は名草郡の郡名に、ウジヒコの「ウジ」は名草郡内の小地名にそれぞれ由来する具体的な名義であるのに対し、アメノミチネやカミムスビはともに抽象的な名義である。(ii)については、ウジヒコはすでに『記』『紀』段階で見えており、ナグサヒコも散逸した『山城国風土記』に見えていた可能性が高いが、アメノミチネ・カミムスビは『姓氏録』段階になってようやく初見する。(iii)については、ウジヒコを始祖とする氏族は一氏のみであり、分布地域は紀伊国に限定される。ナグサヒコを始祖とする氏族は計四氏(直接の始祖とする氏族は二氏、系譜を遡らせる氏族は二氏)が見られ、紀伊国・和泉国に分布している。アメノミチネを始祖とする氏族は計十二氏(同じく十氏・二氏)が見られ、

紀伊・和泉・河内・大和の各国と右京に分布している。カミムスビを始祖とする氏族は計三六氏(同じく一氏・三五氏)を数え、紀伊・和泉・河内・大和・山城・摂津の各国と左右京に分布している。

これらのことから、ウジヒコ→ナグサヒコ→アメノミチネ→カミムスビの順に、(i)地名を含む具体的な名義から抽象的な名義へと変化する、(ii)紀直氏の始祖としての初見年代が降る、(iii)その人物(神格)を介して同祖系譜を形成する氏族数が増加し、分布地域が拡大する、という傾向を読み取ることができる。これは、紀直氏の始祖がウジヒコ→ナグサヒコ→アメノミチネ→カミムスビの順で創出・架上されていった過程を示していると考えられる。

そこで次に、これら四者が紀直氏の始祖とされるに至った経緯について考察を加えた。その結果を、紀直氏の成り立ちに即して時系列に整理するならば次のようになる。

五世紀前半には、ヤマト王権の対外交渉の拠点として、紀伊水門がクローズアップされた。この頃、のちに紀直氏へと成長する小集団はウジ地域を中心に活動しており、ヤマト王権との交流を開始したことで河川交通と海上交通を掌握し、このことが当該地域一帯で主導的立場を確立する重要な契機となった。五世紀後半にはヤマト王権の拠点は難波に移動するが、その後も紀直氏の前身集団は紀伊水門を中心に対外交渉に関与した。この段階の紀直氏の前身集団によって始祖とされたのが、自らの拠点である「ウジ」という地名を冠するウジヒコであった。

その後、紀直氏はウジ地域を拠点としながら、のちの名草郡域にまで勢力を拡大した。六世紀中頃には、その東端に経湍・河辺屯倉が、西端には海部屯倉がそれぞれ設置された。紀直氏はこれらの屯倉における貢納奉仕を管掌者として紀伊国造に任命され、ヤマト王権の地域支配体制に参画することとなった。この頃から、紀直氏はのち

の名草郡域を代表する勢力として、周辺の和泉国日根郡や紀伊国那賀郡の勢力、あるいは紀伊水門を介して地理的には隔絶した地域の勢力と交流するようになった。そこで、当該地域の「ナグサ」を冠するナグサヒコを創出し、紀直氏が古くから始祖としてきたウジヒコや、他氏族の始祖や系譜をナグサヒコに結びつけることによって、同祖系譜を形成した。

七世紀末頃から八世紀前半には、紀直氏が奉祭する日前宮に対して、朝廷から奉幣が行われるようになり、その神威が高まりを見せた。これにともない、ウジヒコやナグサヒコのように紀伊国の具体的かつ現実的な地名を冠する始祖ではなく、日前宮の由緒を体現した始祖が求められるようになった。そこで、高天原を舞台とした天磐戸神話との関連性を示す「アメ」を冠したアメノミチネが創出・架上され、紀直氏と他の諸氏族はこのアメノミチネを介して同祖系譜を形成した。さらに八世紀後半から九世紀初頭になると、諸氏族の間で自氏の系譜を造化三神などに遡らせる動きが発生し、カミムスヒに系譜を結びつける氏族が増加した。こうした諸氏族の動向と連動して、それまで明確な祖先伝承を有していなかった紀直氏も、アメノミチネをカミムスヒの五世孫とすることで、自氏の系譜と神統譜との結節をはかった。よって、カミムスヒを介する同祖系譜は、もはや紀直氏と直接には関係のないところで形づくられたものであった。

さてここで、冒頭で掲げた問題に立ち戻りたい。繰り返しになるが『国造本紀』によれば、石見・大伯・吉備中県・阿武・淡道・久味・天草・葛津立ら各国造が、紀伊国造と同祖系譜を形成している。この同祖系譜は、紀伊国造（紀直氏）を中核とし、西日本沿岸地域における海上交通を媒介として形成されたと考えられている。ただし、このうち石見・葛津立の二国造は「紀伊国造同祖」「紀直同祖」

と明記し、カミムスヒには一切言及していないのに対し、ほかの諸国造はいずれもカミムスヒにまでその系譜を遡らせている。この点について、先行研究では特に言及されてこなかったが、本章での検討結果を踏まえるならば、この二重構造は同祖系譜が形成された時期の相違によるものと考えられる。

前述したように、葛津立国造（葛津氏）の場合は、海上交通で紀ノ川河口地域に到来した際、まず和歌浦の「ワカ」を冠するワカヒコを始祖と仰ぐ小集団と関係を結び、始祖を共有するようになった。そして、このワカ地域の小集団が、ウジ地域を拠点としてのちの名草郡域にまで勢力を拡大した紀直氏（の前身集団）の影響下に組み込まれた際、ナグサヒコを介して紀伊国造（紀直氏）と同祖系譜を形成することになったと推測される。その時期は、六世紀中頃が一つの基準となるであろう。また、石見国造の場合は「紀直同祖」とする以外に詳細は不明であるが、おそらくは葛津立国造（葛津氏）と同様の経緯で、紀伊国造（紀直氏）と関係を持つようになったと思われる。

一方、大伯・吉備中県・阿武・淡道・久味・天草らの諸国造については、およそ八世紀後半から九世紀初頭にかけて、紀伊国造（紀直氏）がその系譜をカミムスヒにまで遡らせた段階で、同祖系譜が形成されるに至ったと考えることができる。その経緯については、二通りが想定される。まず紀伊国造と淡路国造、石見国造と阿武国造、葛津立国造と天草国造など、地理的に近接している一部の国造に関しては、おそらくは海上交通による直接の交流関係が背景となって同祖系譜が形成されたのであろう。それ以外については、紀伊国造（紀直氏）と関係のないところで、個々の国造が独自にカミムスヒにまで系譜を遡及させたために、結果的にカミムスヒを介した同祖系譜が結ばれたという場合もあったと思われる。

もつとも上記のように考えられるからといって、それは必ずしも『国造本紀』の信憑性を否定するものではない。個々の国造にとつての始祖(たとえば大伯国造にとつての佐紀足尼)は、系譜がカミムスヒに結びつく以前より伝えられていた可能性がある。ここで言えるのは、あくまでも従来の分類で一括されてきた諸国造の中に、系譜形成の段階差が認められるということである。このことはカミムスヒを介して結びつくグループ以外にもおそらく当てはまるであろう。こうした観点から『国造本紀』を読み直すことによって、個々の国造の成り立ちをより明らかにすることができると思われる。それについては別の機会に論じることとしたい。

- (1) 太田亮『全訂日本上代社会組織の研究』(邦光書房、一九五五年)。
- (2) 鎌田純一『先代旧事本紀の研究』研究の部(吉川弘文館、一九六二年)。
- (3) 新野直吉『国造と県主』(至文堂、一九六五年)、同『日本古代地方制度の研究』(吉川弘文館、一九七四年)。
- (4) 篠川賢『日本古代国造制の研究』(吉川弘文館、一九九六年)。
- (5) これまでに筆者は、紀伊国造に関する以下の論考を発表している。拙稿「紀伊国造の始祖伝承とその形成過程」(『アジア地域文化エンハンスング研究センター報告集』三、二〇〇五年)、同「紀伊国造系譜の編纂と書き継ぎ」(『早実研究紀要』四〇、二〇〇六年)、同「紀伊国造と日前宮鎮座伝承」(『東アジアの古代文化』一三三、二〇〇七年)、同「紀伊国造の系譜とその諸本」(『ヒストリア』一一〇、二〇〇八年)、同「紀伊国造系図」の成立と伝来過程(『和歌山県立博物館研究紀要』一五、二〇〇九年)、同「紀伊国造と日前宮縁起」(『香川県立図書館紀要』十四、二〇一〇年)、同「紀伊国造次第」の書写方針と注記(『香川県立文書館紀要』十五、二〇一一年)、同「紀伊国造次第」の成立とその背景」(『彦根論叢』三八九、二〇一一年、掲載予定)。
- (6) 以下、史料によって表記が異なる人名(神名)については、原則としてカタカナで表記する。
- (7) 佐伯有清・高島弘志編『国造・県主関係史料集』(近藤出版社、一九八二年)に拠った。
- (8) 篠川賢『日本古代国造制の研究』(前掲)。

- (9) 熊谷公男「令制下のカバネと氏族系譜」(『東北学院大学論集 歴史学・地理学』一四、一九七九年、溝口睦子「日本古代氏族系譜の成立」(『学習院学術研究叢書』一九八二年)、義江明子「日本古代系譜様式論」(『吉川弘文館』二〇〇〇年)など)。
- (10) このほかにトヨミミも、『紀』神功皇后摂政元年二月条に「紀直祖豊耳」と見えていて、ただし、アメノミチネ・ナグサヒコ・ウジヒコは他史料で系譜記事にのみ登場し、具体的な事績が伝えられていないのに対し、トヨミミは神功皇后の朝鮮半島への遠征に付き従ったことが伝えられており、上記の始祖とはやや性格を異にする。よって本稿では、直接の考察対象から除外している。
- (11) このほかに『天孫本紀』には「弟大新河命。此命(略)紀伊荒川戸俣女中日女為妻、生四男」とある。
- (12) 拙稿「『紀伊国造次第』の成立とその背景」(前掲)。
- (13) 榮原永遠男「古代における紀北四郡の郷の配置」(『紀伊古代史研究』思文閣出版、二〇〇四年、初出一九九一年)、寺西貞弘「紀伊国和名抄郷の再検討」(『地方史研究』二五六、一九九五年)など。
- (14) 日下雅義「地質と地形」(『和歌山市史』一、一九九一年)など。
- (15) 蘭田香融「岩橋千塚と紀国造」(『日本古代の貴族と地方豪族』塙書房、一九九一年、初出一九六七年)。
- (16) 蘭田香融「大和王権と古代の和歌山」(『和歌山市史』一、前掲)など。
- (17) 『紀伊続風土記』によれば、この付近の田地に「得津」という字が存在したという。
- (18) 『和歌山県史』古代史料一―三三三、三三四。
- (19) 本稿では、氏族を政治組織と捉え、こうしたままとりはおよそ六世紀代に形成されたとの理解に立っている(直木孝次郎「氏」の構造について「『日本古代の氏族と天皇』」『塙書房』一九六四年)、義江明子「日本古代の氏の構造」(『吉川弘文館』一九八六年)、中村英重「古代氏族と宗教祭祀」(『吉川弘文館』二〇〇四年)、中村友一「日本古代の氏姓制」(『八木書店』二〇〇九年)など)。よって、それ以前には当然、紀直氏という明確なまとまりは存在していなかったと考えられる。この時期の勢力について、榮原永遠男氏は「紀氏集団」との呼称を用いているが(榮原永遠男「『紀伊古代史研究』」思文閣出版、二〇〇四年)、筆者は紀直氏への連続性を重視する観点から、「のちに紀直氏を構成するようになる集団」との意味で、六世紀以前についても原則として「紀直氏」という表現を用いることとし、必要に応じて「紀直氏の前身集団」などと注記する。
- (20) 和歌山県教育委員会編『鳴滝遺跡発掘調査外報』(和歌山県教育委員会、

- 一九八三年、和歌山県文化財研究会編『鳴滝遺跡発掘調査報告書』（和歌山県教育委員会、一九八四年）など。
- (21) 横山洋「古墳時代中期の大型倉庫群」〔大阪の歴史〕三〇、一九九〇年、山尾幸久「五世紀の大和政権」〔きのくに文化財〕十七、一九八三年、都出比呂志「日本農耕社会の成立過程」〔岩波書店、一九八九年〕など。
- (22) 小笠原好彦「集落遺跡からみた古代の大型建物群」〔クラと古代王権〕ミネルヴァ書房、一九九一年、蘭田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」〔日本古代の貴族と地方豪族〕前掲、初出一九七〇年、山中敏史「律令国家の成立」〔岩波講座日本考古学〕六、岩波書店、一九八六年）など。
- (23) 栄原永遠男「鳴滝倉庫群と倭王権」〔紀伊古代史研究〕前掲、初出一九九四年。
- (24) 拙稿「『紀伊国造次第』の成立とその背景」〔前掲〕。
- (25) この時に立てられたのは「名草評」であつたと考えられるが、本稿では煩を避けるため「国造次第」の表記に従つて「名草郡」としておく。
- (26) 屯倉の設置記事は『紀』では継体朝から欽明朝にかけて、特に安閑朝に極端に集中していることから、その設置年代を潤色とする見方がある（津田左右吉『日本古典の研究』下〔岩波書店、一九五〇年〕など）。それに対して、屯倉の設置はすでに『紀』景行五十七年十月条に見えており、安閑朝に仮託されているわけではないとして、その年代を積極的に評価する見解も出されている（大川原竜一「国造制の成立とその歴史的背景」『駿台史学』一三七、二〇〇九年）。
- (27) 館野和己「屯倉制の成立」〔日本史研究〕一九〇、一九七八年、仁藤敦史「古代王権とミヤケ制」〔考古学ジャーナル〕五三三、二〇〇五年）など。
- (28) 吉田晶「日本古代国家成立史論」〔東京大学出版、一九七三年〕、館野和己「ミヤケと国造」〔吉村武彦編「古代を考える 継体・欽明朝と仏教伝来」吉川弘文館、一九九九年〕、大川原竜一「国造制の成立とその歴史的背景」〔前掲〕など。
- (29) このほかに『記』崇神段には「木国造名荒河刀弁」、「天孫本紀」には「紀伊国造智名曾」とある。ただし、これらが伝承上の人物であることは確実であり、実際に国造であつたかのように遡らせて記されていると考えられる。
- (30) 栄原永遠男「紀氏と倭王権」〔紀伊古代史研究〕前掲。
- (31) 具体的事例としては、拙稿「甲斐国造の「氏姓」に関する再検討」〔日本史研究〕五八四、二〇一一年）参照。
- (32) 蘭田香融「岩橋千塚と紀国造」〔前掲〕。

- (33) 蘭田香融「岩橋千塚と紀国造」〔前掲〕。
- (34) 祭神・御神体については古来より種々の解釈が行われてきたが、現在の日前宮では「神鏡を以て日前大神ノ御神体と為し、日矛を以て国懸大神ノ御神体と為す」とする『紀伊統風土記』の解釈を採用している。本稿でもこの説にしたがっておきたい。
- (35) 松前健「日前・国懸神宮の祭神と古代宮廷」〔菊地康明編「律令制祭祀論考」塙書房、一九九一年〕。
- (36) 工首氏は他に見えず、なぜこの一氏のみがカミムスヒを直接の始祖としているのかは不明である。ただし、カミムスヒにまで系譜を遡らせる氏族の中には、爪工連氏（左京神別中・和泉国神別）があり、佐伯有清氏は工首氏と爪工連氏が「関係が深い氏族」であつた可能性を指摘している（佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証編第六、吉川弘文館、一九八三年）。とするならば、爪工連氏と同様に、工首氏も元来は独自の始祖を持つていたが、のちに何らかの理由でその部分が脱落したのではなからうか。
- (37) 吉村茂樹「倭漢惣歴帝譜図について」〔ソフィア〕九一、一九六〇年、菅澤庸子「新撰姓氏録」における姓意識と渡来系氏族」〔史窓〕五八、二〇〇一年、佐伯有清「日唐の古代氏族と『新撰姓氏録』」〔東アジアの古代文化〕一、二〇〇二年、保立道久「日本史における系譜・系図史料」〔東アジアの族譜資料の構造と活用方案の研究〕韓国江原大学校産学協力団主催シンポジウム、二〇〇九年）など。

付記

本稿は、科学研究費基盤研究C「日本古代の国造制と地域社会の総合的研究―国造制研究データベースの構築―」（課題番号25250839）の研究成果の一部である。

The Formation and Development of "Kii-no-Kuni-no-Miyatsuko"

Masanobu Suzuki

In this article, at first, I compared the ancestor of "Ki-no-Atai" clan. The ancestor of "Ki-no-Atai" clan is, "① Kami-musuhi", "② Ame-no-michine", "③ Nagusa-hiko", "④ Uji-hiko", "⑤ Arakawa-tobe", "⑥ Chinaso", "⑦ Kimi-tsumi", "⑧ Waka-hiko". Of these, as a result of having analyzed ①~④, in order of "Uji-hiko", "Nagusa-hiko", "Ame-no-michine", "Kami-musuhi", their names become abstract from a concrete. These appear by this order. And, in this order, the number of same families increases. Furthermore, those distribution area spreads out, too. Therefore, it is thought that the ancestor of "Ki-no-Atai" clan was made in this order. Then, I considered its process. In the first half of the fifth century, "Kii-no-Minato" was a diplomatic foothold of "The Yamato Dynasty". Its center was a "Uji-area". Therefore the ancestor of "Ki-no-Atai" clan was named "Uji-hiko". The sixth century middle, The power of "Ki-no-Atai" clan spread through "Nagusa-area". Therefore the ancestor of "Ki-no-Atai" clan was named "Nagusa-hiko". From around seven end of century eight century first half, "Nichizen-gu" that "Ki-no-Atai" clan enshrined was worshiped. Therefore the ancestor of "Ki-no-Atai" clan was named "Ame-no-michine". And, from eight century latter halves the ninth century beginning, the number of clans who make "Kami-musuhi" an ancestor has increased. Therefore the ancestor of "Ki-no-Atai" clan was named "Kami-musuhi". The genealogy of "Ki-no-Atai" clan was formed in this way.